

# 人物

## みのかも

8

美濃輪群次

### 明治期地方政治の開拓者

明治の初期から中期にかけて美濃加茂地域の地方自治の先駆者として活躍した美濃輪群次は天保二年（一八三一）蜂屋村広橋に生まれた。

美濃輪家の先祖は宝泉坊という修験道の大先達で十五世紀に蜂屋に定住して以来、江戸時代には広橋組の組庄屋を勤めるなどの旧家であった。

群次が三十歳半ばにさしかかった頃、この地方にも幕末の動乱の波が押し寄せてきた。水戸浪士の一隊が太田宿を通って西に向かった年の翌年の慶応元年（二八六五）二月、群次は太田代官所の非常時の警固にあたる「陣屋守」の一員となり、砲術を担当することになった。入隊後、尾張藩において稲富流種子島鉄砲術を修得したが、その上達著しく一年後には免許を受け、帰郷して隊員中の希望者に指導を行うまでになった。

やがて幕府は崩壊し、慶応四年正月、新政府の密命を受けた竹沢寛三部は「東山道官軍先鋒隊」を率いて美濃に入り、幕府の笠松郡

代役所を接収したほか各地の旗本領を処分しつつ飛騨へ向かった。尾張藩ではこれに協力するため太田代官所に命じ、陣屋守のうちより二十名を選抜して竹沢隊を護衛させることにした。群次はその一員に選ばれ、約五十日の間竹沢隊



略歴→天保2年(1831)蜂屋村広橋に生まれる。明治6年、加茂郡十二小区権区長、明治22年、初代蜂屋村長に選任される。明治38年8月、死去。享年75歳。

に同行した。維新の動乱の中に身を投じたこの経験は、彼がのち地方自治の責任者として活躍するのに大きな糧となったであろうことは間違いない。

明治四年、廃藩置県によって尾張藩は消滅、翌年には岐阜県が誕生した。江戸時代続いていた庄屋制度は戸長制度と改められ、群次は初代の中蜂屋村戸長に就任した。

ついで明治六年四月、県は「大小区制」を実施する。加茂郡全域は第十大区となり、さらに十二の小区に分けられた。太田・上古井・下古井・山之上・上蜂屋・中蜂屋・下蜂屋・伊瀬の八ヶ村が十二小区とされた。大区の区長は選出が容易でないという理由で小区の区長である権区長（後に副区長）が回りにちで区長事務にあたった。権区長については、区内の地主代表らによって公選し、これを県庁において審査した上で任命する方法をとった。

を望む厚信望の厚さで群次は初代の十二小区権区長に選出されたのである。江戸時代、庄屋の仕事は何かと多忙であったが、明治初期の戸長・区長の職務はそれに比較にならないほど大変な業務であった。この時期は社会制度の大変革に伴う諸制度の草創期であり、国や県からの布告・伝達は引きもきらず、又、その内容は猫の目のように変わった。この時期の戸長の大きな仕事は戸籍の作成、徴兵事務、学校創設と児

童の就学奨励などを中心に極めて広範囲にわたった。群次の仕事ぶりには現実的で飛躍はないが、奉仕によって出費を極力おさえることにつとめ、民衆のため東奔西走、労を惜しまなかったという。彼は村民からも県からも高く評価され、戸長・区長に続いて加茂郡役所の設立とともに郡役所書記に、連合役場発足と同時に蜂屋連合村の官選戸長に任せられ、又、明治二二年、初代の蜂屋村長（その後二期歴任）に就任するなど、絶えず新しいポストの初任者として地方政治の開拓につとめた。

群次は、政治的功績とは別に名産の蜂屋柿の保存と改良に意を注いでいる。明治時代、三回にわたって蜂屋柿を万国博覧会に出品、三三年のパリ万博では銀牌を、次のセントルイス万博では金牌を獲得し賞賛をうけたのである。明治三八年八月一日、惜しまれて群次はこの世を去った。七十五歳であった。



パリ万博でうけた賞状